誕生を目撃された沼

草野貞弘

幌測候所の記録
明治三一年九月六日　雨
七日、八日　強風豪雨
六日一〇時二〇分から八日の八時四〇分までの、四六時間二〇分の間に於ける降水量一五七ミリメートル

「馬だ、馬を助けろ！」

枕もとでの水音に、それが何を意味するのか、瞬時には判断できえなかった荒太郎は、隣に寝息をたてている妻を叩き起こして叫んでいた。

来る日もくる日も体力の限りを尽しての土との闘い、ヤチダモの木を倒しては耕地を広げてきた。掘り起こす根株は、大地に喰いついて離れようとはしない。一日かかっても、一本さえ堀り上げることができない日もあった。

根株は、馬に引かせて畑の隅に積み、火をかける。入植以来、幾たび同じことをくり返してきたことか。穴を埋め、耕して、それでも一町歩ほどの自分の土地を持てるようになった。粟を植え、小豆を作った。反当り二俵の収穫しかなくても、どうにか食べて、そのうえいくらかは、石狩川の船つき場までの排水溝を掘った土で盛り上げた泥炭のぬかるみ道に、馬をあえがせながら出荷できるようになってきたのだった。

寝耳に水。

綿のように疲れきった体を横たえてからどれだけの時が過ぎていただろう。夕方からの激しい雨足に、明日は少しは休めるか、農作業のおくれを少し心配しながらも、床についたのは明治三十一年九月五日の早い夕ぐれのきた夜であった。

「鶏はどうする！あんた――！」

妻の悲鳴に近い叫び声。

「上にあげるんだ！屋根だ。屋根の上だ！」

土間の台所では、半分しか入っていなかった水瓶が浮き上ってから横をむいて、音もなく濁水のなかに沈んでいった。開拓小屋の床は、一尺の高さもない。箱膳が、浸水に浮き出してひとつ、またひとつ壁ぎわに動いていく。

家財とてない入植者には、布団と衣類を屋根裏に上げて、残り少い貯蔵食糧が濡れるのを防げば当座はしのぐことができる。命の次に大切なものは、唯一の資本、開墾に欠かすことのできない馬であった。馬を失うことは、入植成耕の命脈を断たれることになる。

北国の夜明けは早くくる。

屋根裏といっても、梁に丸太を渡しただけの、せまい僅かな空間に、人も鶏も床に渡した踏み板から長い首だけを突き出した馬もいる。おびえた目にも、やっと見えるだけに光がさして朝が明けてきた。

トウキビが、ななめに倒され穂先を見せるだけの、一面の水。逃げだすすべはない。屋根を破って、まわりの様子をうかがった荒太郎と妻は、覚悟を決めなければならなかった。水が引くまで、ただ待つだけ、ほかに方法はない。

幸い、雨は小降りになっている。

・・・・・豆は駄目だ。水が引いたら、泥を落とせば幾らかのトウキビは穫れるだろう。煤田（炭鉱）に出稼ぎすれば冬は越せる。来年に勝負しよう。土地さえ残れば、まだ、俺たちは若いんだ・・・・・自分との問答で荒太郎は少しずつ落ちつきを取り戻していった。遠く離れた美唄川の土堤から、開拓仲間が手を振って激励してくれているのも、彼の心を平静に向かわせていった。

石狩国沼貝村字小川宅地。

明治二十七年、上美唄原野の中に、密居宅地として設定された土地である。翌二十八年には五戸が入植した。そこは、美唄川の流れに沿った、上美唄原野の中では比較的に泥炭が少なく、ハンノキ、ヤチダモがまばらに生えた区画地であった。川沿いだけは樹木の成長もよく、林となって、曲り

くねった川の両側に屏風をたてたように同じ曲りで続いていた。

与えられた荒太郎の区画は、その林の縁からはずれかけた一帯で、地味はかなり劣るものの土地が平なことが、何よりも魅力をもって彼の心をはずませていたのである。内地を発つとき、ひとり心に誓った夢を実現させるには、地形としては申し分のない所であった。

米を作ること。蝦夷地に、きっと米を作ってみせる。同じ雪国の越中で作れる稲が、なぜ北海道でできないのか。富山の貧村から大きな夢だけをたったひとつの財産として懐に入れて渡ってきた荒太郎であった。

入植してから、その前年に峰延で水稲の試作が成功したことを人伝てに聞かされた。自分が最初ではないにしても、米をつくる夢が、すぐそこまで近づいてきたことで、彼の心は希望でふくれあがっていた昨今だったのである。

二日間が経った。

空は晴れているのに、まだ水は引こうともしない。堤防寄りの開拓仲間が急造の筏で助けにきてくれた。馬と妻を避難させた荒太郎は、屋根裏で水の引くのをひたすらに待った。引き上げるように誘ってくれる仲間の言葉は嬉しかったが、荒太郎には、いま離れたら、ここまで苦労してつくりあげた土地と家を、捨て去るような気がして離れるにはしのびきれないものがあったのである。

冷たくなったさしいれの粟飯をほおばって、三日目が過ぎた。幸い、少しずつだが水かさが減っていく。風のない、とばりをおろした水面は、星を映して、それが洪水の溜り水とは思えないように神秘的な夜となって暮れていった。

渡している丸太の並びが不安定で、寝返りばかりしていたようなまどろみは、いきなり下から突きあげてきた家屋のゆれで破られた。

はね起きた荒太郎が屋根の破れ目から見たものは、なんとも不可思議な光景であった。

九月八日の、横からさしこんだ朝の光の中で、ほとんど引いて畔溝に残った水だけが白い畑に、泥をかぶった小豆が打ちひしがれている。めぐらした視線に捕えたのは拓いた畑と原野との境目に沿って、仕かけ花火のように連なって吹き上る水の柱であった。

太く短い柱、細くて優に一丈はあるであろう水の柱。竜吐水のように、噴水のように、潮を吹く鯨のように、端からはしまで七色に輝やかせて朝日が水を染めていた。

また、ゆれがきた。

屋根に葺いた葦の束にしがみついている耳に、低くて大きな地鳴が響きわたる。

「地面が、地面が流れる！畑が・・・」

声にならない言葉をはいて見開いた口と目の前で、ゆっくりと畑が盛り上った。吹きだした大量の泥水に、トウキビも小豆も、泥炭の畑土ごと浮いて割れ、重なり、濁流となって南の方に動いていった。

荒太郎には、流れ去った畑の跡に、うずを巻いている濁水に浮いて、生えたまま廻っている泥炭塊についた葦の葉の緑の色が、妙に脳裏にしみこんでいった。

さしもの洪水も、どうにかおさまったとき、荒太郎の汗が生みだしていた耕地は、真新しい泥炭の切り口を岸辺に見せて大きな沼と化していた。

夢は破れ、畑を失って暮しのてだてを断たれた入植者には、断腸の思いで小川宅地から去る運命しか与えられていない。

残った人びとは、彼、貞広荒太郎の胸のうちを思いやって、新しく出現した沼に「貞広沼」の名を冠することで、去りゆく荒太郎の無念やるかたない心情を遺したという。

泥炭層と洪水が遺棄した沼

湿性地に生えたヨシやガマなどの植物は、枯れても水中に没したまま分解せずに、年ごとに厚い層をつくっていきます。

沼が、これら植物の遺体で埋まると底土からの肥料分が届かなくても成育できるスゲ類しか育たなくなってきます。それがまた堆積しつづけると、一層小型のミズゴケなど、雨水だけでも生活できる植物だけの草原で、もとの沼が盛り上るように層をなした泥炭の重なりだけの土地ができてきます。

洪水は、時に、層の下方にもぐりこんで伏流水となり、泥炭地を押し上げ流してしまうことがあるということです。

美唄市上美唄町に、沼の端と呼ばれる集落があります。貞広沼は、集落の中央に南北五〇〇メートル、最大幅五〇メートルのさつまいものような形をして横たわっています。いまは、ヘラ鮒の釣場として知られていますが、かんがい用水が縦断しているために浅くなりせまくなって、沼の命脈は年ごとに残り少なく縮まっているようです。

春先は、氷が融けるのが一番早い沼なので、オジロワシやオオハクチョウが最初に立寄る場所となっています。

（美唄市立西美唄中学校教諭）